

私語

□ 「私語」論争

一九八五年六月三十日の朝日新聞「声」欄に、授業中の私語のひどさを嘆くある学生の投書が載った。七月十五日の同欄では、大学教授A氏が、勤務校での私語のひどさを紹介し、「学生の教授批判はいつの時代でも盛んであるが、その前に授業中の態度を改めてもらいたい。」と述べた。これに対して七月二十八日の同欄では大学教授B氏が、「学生はなぜ私語するか。私語していてもすむからである。講義では受け身でたるんでいられるからである。(中略)常

に緊張を必要とする教育方法をとれば、私語はなくなる。講義は学生をたるませる。教師が講義をやめ、教育方法を工夫すればいいのである。」とA氏を批判した。(宇佐美寛編『看護教育の方法』医学書院 一九八七年 先のB氏は宇佐美氏である。)

□ 「私語」の定義

新堀通也『私語研究序説 現代教育への警鐘』(玉川大学出版部 一九九二年)という本がある。大学生の私語という現象が、一冊の研究書のテーマとなるといこと自体、全国の大学における私語の蔓延という深刻な事態の一つの反映であろう。さて、私語を研究対象とするにはこの言葉を定義する必要がある。新堀氏は、私語は通俗語であつて厳密な定義は存在せず、むしろこの語に対して人々が描くイメージ・意味の違い自体が研究対象になると言う。

新堀氏が勤務する武庫川女子大学の教師二百四十五人(専任・非常勤を含む全教師の四五・四%)のアンケート回答では、私語の定義を「授業中に生じるすべてのおしやべり」と、最も広範囲に厳しくとらえる人(二八%)がいる一方、「授業を妨げるおしやべり(三五%)」、「授業に関連ないおしやべり(三四%)」と限定的、許容的にとらえる人もいる(同書、三十六ページ)。

一方新堀氏らは、国公立大学等十三校、二千八百六名の学生に対しても私語に関するアンケート調査をおこなったが、同じく私語の定義を問うたところ、「授業中に生じるすべてのおしやべり」が六%、「授業を妨げるおしやべり」が四〇%、「授業に関連ないおしやべり」が五三%であつた。つまり、教員が私語とみなしても、学生は私語とみなしていないケースが多いわけである(同書、二一〇ページ)。

□ 教師は私語の原因をどうみているか
前述の教師アンケートにおける、私語の

原因についての自由記述の分類結果を見ると、最も多いのは「学生の意欲」に関するもの(四六%)である。具体的には、「学習意欲の欠如」(知的好奇心の不足、受動的態度)、「忍耐力の不足」(集中心の不足、気まぐれ)、「学習態度の悪さ」(マナーの欠如)である。

第二位は「授業内容」に関するもの(四六%)で、具体的には、「興味関心のずれ」(面白くない、役に立たない、教師と学生とのミスマッチ)、「学問的な程度のずれ」(分からない、難しすぎる)である。

第三位は、「学生の受講動機」(二九%)で、具体的には、「学習への動機づけの不足」(目的意識や向上心の不足)、「不本意出席や不本意履修」(出席するため、単位を取るため、必修科目だから)、「学力不足」(レベルの低さ、基礎学力の不足)である。以下、第四位、「教え方の技術」(二〇%)、教授法の無知、指導力の不足、話術の貧しさ、声の小ささ、一方的授業、板書技術の不足、第五位「教師のパーソナ

リティ」(一八%)、人間的魅力の欠如、権威の低下、学生理解の不足、第六位「集団過程」(一一%)、甘え、クラスの雰囲気、教師の「見て見ぬふり」、相互交流の不足、第七位「授業設計」(七%)、授業計画の不備、準備不足、座席の自由)と続く。

総じて、学生に原因を求める項目(第一位・三位、合計七五%)と、教師に原因を求める項目(第二・四・五・七位、合計六五%)の延べ回答率は、接近している(同書、二二六―七ページ)。本稿の冒頭で紹介したA・B両氏の「論争」は、どちらの主張にも一理ありということだろうか。

□ 学生は私語をどうみているか

最後に前述の学生アンケート結果から、学生自身が私語についてどう考えているのかを紹介しよう(いずれも複数回答)。自分が私語をしているときの気持ちは、「教師に悪いなと思う」五二%、「周囲の学生に悪いなと思う」二八%、「楽しい」二一%、「どうせ教師には分からない」九%、「何

も感じない」一一%、「教師に問題がある」一九%。周囲の学生に私語に対しては、「教師が気の毒になる」四二%、「腹が立つ、いらいらする」三八%、「私語を止めて欲しい」三四%。周囲の私語への対処については、「気にしないようにする」五六%、「友人に相談する(ボヤク)」二〇%、「何もできず、がまんする」二〇%、「授業に集中する」一九%、「授業放棄(寝る・エスケープ)」一六%で、言葉・視線・身振りで「注意する」という回答はごくわずかである(同書二二―二二ページ)。私語への罪悪感や批判意識が積極的行動に結びつかないのである。

さとう・としあき 三重大学・教育学部